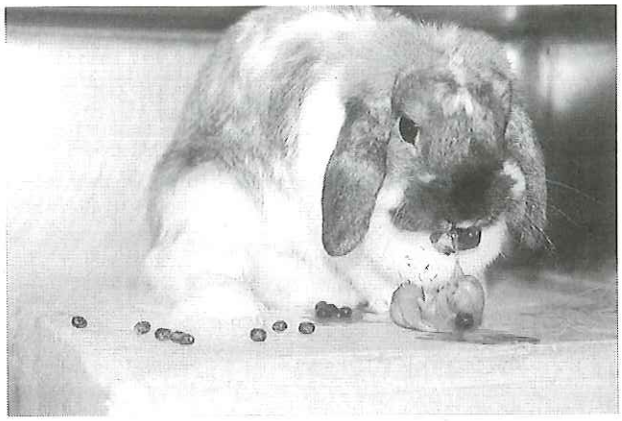


日くらいになると、わらをいっぱいくわえて巣作りをしたり、手を出したりすると怒ったりします。こんなことも、飼育体験のなかで子どもたちは見たり感じたりすることができるのです。

この写真が実際の出産シーンです。これが子ウサギで、これが胎盤です。これを見て「気持ち悪い」という方もいらっしゃいますが、これを子どもに見せるとすごく感激します。お母さんが胎盤の処理をしたり、小さい身体で子ウサギの面倒を一生懸命見たりする姿に、子どもたちは感動するんでしょうね。

生まれて１日目、手のひらに乗るくらいまでになりました。これでだいたい４０ｇくらいです。ウサギによっては、育児放棄をする個体もいるんですが、先ほどもお話ししたように、ウサギに躾をきちんとすると、生まれた赤ちゃんにさわっても大丈夫になるんです。

お母さんウサギは、出産後３０分くらいすると、おなかの毛を抜いて巣のようなものをつくり、赤ちゃんを守るようにします。それで、５日目くらいになるとこんなに大きくなるんです。

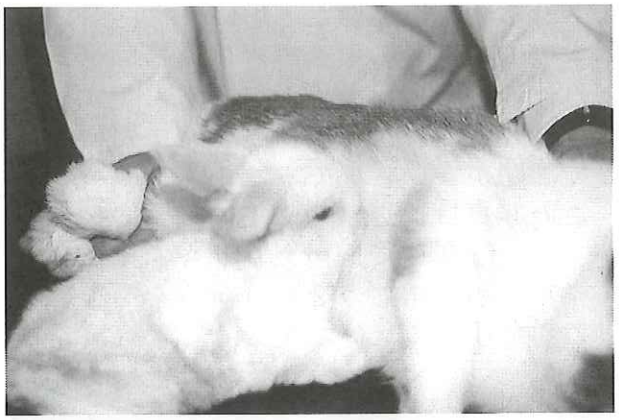
ウサギは、１日１～２回、５分か１０分くらいしか授乳しません。授乳後の赤ちゃんを揺すってみると、おなかの中でミルクが動くのが見えたりします。是非このような体験を子どもたちにさせてみてください。

ウサギでも性格はいろいろあって、性格がきついウサギは、子どもでも人間の手を見たりすると噛んだりすることもあります。だからやはり、目的にあった動物種を、温厚な動物が実際にいるんですから、このような動物を活用する必要があると思います。

生まれて１０日くらいすると目が開いてきます。子どもが観察すれば、「いつ目が開くの？」などと、いろいろな関心が出てきて、先生と子どもたちで予想を立てあったりしながら、お互いの信頼関係が深まっていったりするんです。

生まれて２０日くらいになると、わらを食べたり、牧草を食べたりするようになります。子どもたちがこれを見れば、ウサギが草食獣であることを、体験をとおして発見したりするわけです。

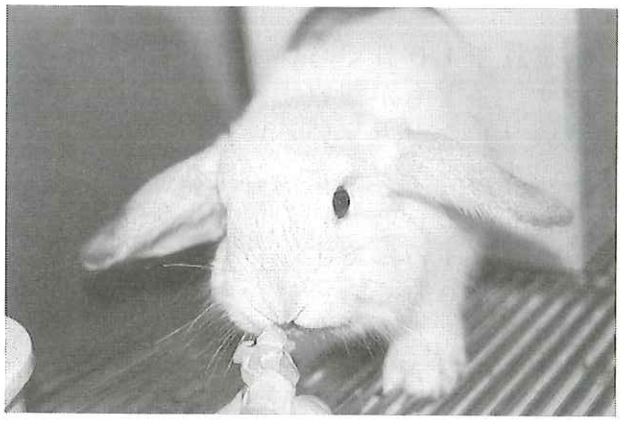
この写真は授乳しているところです。これは、写真を撮るために、お母さんウサギ



を寝かせているんですが、子どもはおっぱいが欲しくて欲しくて、身をよじらしておねだりしています。どうせ出産させるのであれば、このような体験を是非、子どもたちにさせてあげたいです。動物飼育に対してみなさんの深い理解があれば、こういう状況を子どもたちに見せることができるわけです。これこそ、動物介在教育、命の大切さの実体験だと言えるのです。

この写真のウサギはしずかちゃんといいます。では、大きくなったら何を食べるんだろう？ということですが、小学校に行って、「ウサギさんの好きな食べ物何？」と聞くと、「ニンジン！」という子が８割くらいです。これは日本人の特性で、好きか嫌いかわからないときに、図書やテレビなどから得た情報をもとにして、「ウサギはニンジンが好きだ」と決めつけてしまうんです。ウサギも性格が皆違うように、食べ物の好き嫌いも当然あるわけです。それを見極められるような、飼育体験をさせることが大切です。

そういう体験をさせるためには、やはり

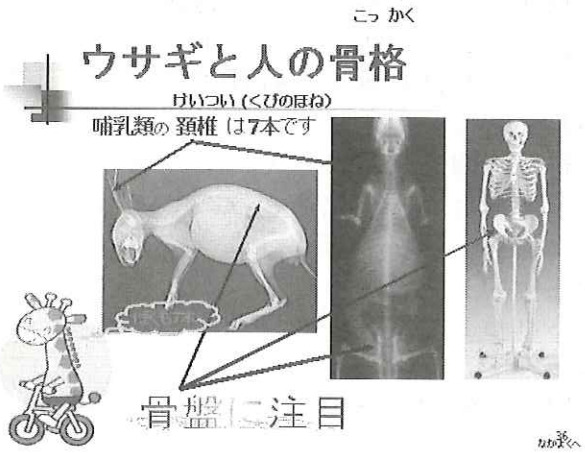


最初の段階が大切です。その段階で、是非、獣医師と連携していただいて、動物飼育の基礎基本を学んで、みなさんの指導力を向上させることが必要だと思います。

学校での飼育の引き継ぎは、掃除当番などは比較的しっかりとしているんですが、計画的な飼育に関しては、まだまだ研究不足で課題が多い状況です。

この写真は群馬県の教室内飼育の例ですが、１，２年生で飼ったウサギをまた新しい学年に引き継ごうという試みをしているところです。

また、理科においては、動物の身体の違いなどを観察させることもできます。これはウサギの頭のレントゲン写真ですが、「ウサギの歯は何本？」と聞くと、たいていは上２本下２本で４本と答えますが、実際にはご覧のように、前歯の後ろにも２本あって、合計６本のはがあることがわかります。これを子どもたちが見ることによって、「これはどうして？」というような疑問が出てくるのです。また、前歯の後ろには歯が生えていなくて、なぜ奥歯がこんな形をしているのか、など、題材を投げかけてあげないと、子どもは不思議に思わないんです。また、ウサギの首の骨と人間の首の骨の比較をしてみたりして、学年進行でこのような学習の計画を立ててあげることがいいのではないかと思います。



群馬県では、道徳教育を含めて、命の大切さを学ぶ体験ということで、こういった計画的な飼育をさせ、子どもに直に命の大切さを教えるような指導に取り組むようにしています。群馬県では、「動物ふれあい教室」といって、１，２年生の生活科の授業で、ＴＴ方式で学校の先生と協力しながら、単元テーマを決めて、事前事後学習も含めた教育計画を立てて行っている事例を簡単に説明します。これが事前学習です。動物の絵を描こうという授業です。次の本学習では、獣医師と先生方で相談して、グループ学習にしようと決めたものです。ウサギをひっくり返すと、おとなしくして動かなくなったりするところを観察したりします。また、ウサギの前後のあしの指の数を数えたり、心臓の音を聞いてみたりします。小学生に聞くと、みんな「ウサギ大好き」と答えるんですが、この写真の子を見るとあごを上げていることがわかります。やはり、首の方までウサギが上ってくると怖いのかもしれません。この子の場合は、大好きではなくて、「ちょっと好き」くらいなのでしょう。指導者は、こういうこの

場合、これ以上上に行かないように手を貸してあげるとか、そういった配慮が必要です。

この写真は、ウサギを嫌がる子のためにタオルでくるんであげているところです。ウサギが嫌いな子は「抱っこする？」とウ

サギを差し出すと、手を後ろにまわして、身体をのけぞらせたりします。こういうこの場合は、ウサギがあまり得意じゃないんだということを、みなさんが理解する必要があります。

子どもがウサギをいやがる理由は、「ひっかくから」、「急な動きをするから」というのが、嫌いな原因の９割です。だから、ウサギを嫌いにさせないために、いろいろな工夫が必要になります。

最終的には、こういった室内飼育に挑戦してみてはいかがでしょうか、ということをみなさんにお伝えしたいと思います。

室内飼育をして、アレルギーなどが心配であるとすれば、学校の玄関であるとか、軒先であるとか、できるだけ身近な場所で飼育する工夫をすればいいと思います。そして、これからは、いかに指導案をつくって、子どもたちのためになる実践を行うことが必要です。

この写真の子は、ニワトリの人工飼育を行って、孵化したときに一緒にいた子で、ニワトリにとってはお父さん（お母さん）のような存在になっています。この子が近くに寄っていくと、頭の上に乗ってきたりするようになりました。こういう体験を子どもたちにたくさんさせることが大切なことです。

動物はかわいいだけじゃなくて、それが食べ物にもなるという事実があるのです。こういう状況をいかに子どもたちに伝えていくか、動物介在教育の重要性を認識していってほしいと思います。そこで子どもたちは何を学ぶのか、何を学ばせたいのか、動物とのかかわり方が深くなると、動物に対する意識がどう変わるのか、変わった場合、心に響く飼育とはどのようなものなのかを考える必要があります。さらに、食物連鎖があることや、地球という大きな規模で、自然や動物を考えていくことができるような子どもを育てる必要があります。まいた種が大きく育つように子どもを育てたいということが、動物を飼育することの大きな意義になるのです。

ですから、みなさんは、動物飼育の基礎基本について、子どもの発達の心理段階からきちんと学んで、指導者としてどうあるべきか、指導案をどう作成するべきか、よく考えなければならない時代になったということがいえます。

以上で終わりにいたします。